



第 93 号 (年 4 回発行) 編集発行 前学 院大 学 会 弘 報 委 員 会 印刷所 (有)小野印刷所

2023 (令和5)年度 9月期学位記授与式挙行



2023 (令和5)年度9月期の学位記授与式が去る九月二十八日(木)午後二時三十分より本学礼拝堂において挙行されました。

今年度の学祭のテーマは、「笑顔をばらまけ」とさせていた...

が中止となったため、私にとっても今年度が初めての学祭となりました。

今年度学祭実行委員会が企画・運営したイベントは、「芸人ライブ」「ピンゴ大会」...

「軽音ライブ」では、私自身、軽音サークルのみなさんの演奏をほ...

等の企画も興味深いものが数多くありました。今年度の弘学祭の反省を活か...

学生支援のありかた

学校法人弘前学院 学長 藁科 勝之



近年いろいろな意味で学生支援のあり方が話題になっており...

生活支援(3項目)、(三)進路支援(5項目)であります。

支援は、それを実現させる下支えとしての取組みとして有効に機能させたいのであります。

生のキャリア形成を支援するプログラムを提供する」と述べています。

深刻な影響を与えており、本学としてはさらに頑張る必要があります。

奨学金については、市町村、企業等の奨学金情報については...

う、学修や生活を組織的に支援すると述べており、「障がい学生学修支援委員会」を設置して...

二〇二三(令和五)年度の弘前学院大学特待生(二年生)に、十一月一日(水)十二時より賞状の授与が行われました。



2023年度特待生授与者

◆文学部 一年 赤平陽央璃

◆社会福祉学部 一年 齋藤 愛生

◆看護学部 一年 傳法ありさ

大事なのは、当事者と事業者の十分な対話による相互理解、それを踏まえた解決策を見出すことにあります。

令和5年度 国語国文学会夏季大会報告

日本語・日本文学科 教授 鎌田 学

7月8日(土) 13時から本学礼拝堂にて国語国文学会夏季大会が開催された。学内関係者および一般の方合わせて34名が参加。夏日のなか参加された方々に感謝申し上げたい。

まず、曹文悦文学研究科2年生が「東洋文化の美の発見―柳宗悦と周作人をめぐって―」のタイトルで研究発表を行った。柳宗悦と周作人が東洋文化に対する批評や撰取をどのように行ったかを、文明史の観点から考察。柳宗悦が西洋文明に批判的な立場をとり、東洋の伝統文化を重視した点を分析した。柳が「民藝運動」を通じて、日本や朝鮮などの伝統的な工芸品を再評価し、それらの美的価値や文化的背景を探究したとまとめた。東洋の美意識が西洋とは異なるものと認識し、その認識が西洋の芸術に新たな刺激を与えることになると考えた柳の思考を辿った。



部日本語・日本文学科専任講師が「外国人散在地域における日本語教育関連支援のあり方―青森県南部地方のフィールドワークを通して考察―」という題目で研究発表を行った。

日本語学習は外国人住民の権利擁護に必要なことであり、事件などを未然に防ぐ機能も果たすことから、健全な社会に欠かせないものである。しかし、国内自治体による日本語教室の運営は、ボランティアに依存している実態がある。そこで、国際センターを立ち上げ、外国人の受け入れ及び日本語教育を推進している青森県三戸郡南部町の事例を紹介。在留資格に合わせたコンパクトな日本語教育を実施することの重要性や外国人と周

辺住民との交流を促す自治体の様子を明らかにした。地域の特性をとらえ、弘前では、どのように応用できるか、本学の特色でもある「キリスト教」に焦点をあて考察を試みた。今後も地域と共に良い取り組みを目指すべく、今後の重要性が窺えた。最後に、今年度後期に本学科目等履修生として来日するジョアンさん、ルカスさんがネット上で登場し日本語とスペイン語で自己紹介を行った。

二つの研究発表に対して多数の質問や意見が寄せられ、堂内は活気に満ちていた。私自身、この会場で三言語が飛び交う機会を初めて体験し、きわめて印象に残る大会であった。

2023年度弘前学院大学英語弁論大会

恒例の英語弁論大会が2023年7月27日に開催されました。弘前学院大学文学部主催によるイベントで、この大会の目的は、第一に本学学生の英語能力(会話力、文法、文章力)を向上させる事であり、第二に、多くの学生が英語学習に励み、より高いレベルの英語能力を身につける事です。また発表者が与えられた課題に対する考えを深め、その考えを分かち合い共に学ぶ事にあります。

今年度は「The Importance of Intercultural Communication (異文化理解の大事さ)」という題目で、英語・英米文学科1年生、伊藤靖将さん、奥口奏未さん、三浦愛菜さん、三上結愛さん、の4名の学生が日頃の成果を発揮しました。出場者は、異文化理解の一環として自国の文化を理解することの重要性について論じました。また、各文化には独自の習慣があり、あらゆる違

いを尊重することが重要であると述べました。出場者たちからのメッセージは、聴衆にとっても洞察に満ち、有益なものであったに違いありません。

聖愛高等学校のALTMワンギ・ジエムズ・ムブグア先生と昨年の英語弁論大会優秀者英語・英米文学科4年生福士さくらさんが出場者のスピーチを採点しました。審査基準としては、内容、英語の流暢性、発音などが重視されました。

English Campで英語力と欧米文化の知識を使ってパズルを解決

2023年度の弘前学院大学イングリッシュキャンプが8月5日(土)に開催されました。文学部学生11名と英語・英米文学科教員6名が参加しました。今年のテーマは「Escape the Prison」で、1日中英語のみを使って様々なアクティビティを行いました。参加者はグループに分かれ、英語がペラペラのスタッフと一緒に1日中楽しみながらアクティビティを楽しみました。午前中は3つのアクティビティ―サイバル・クイズ、ジグソーパズルと英語力チャレンジ、脱出ゲーム。サイバル・クイズではグループごとに、困難な状況で人々がどのように生き延びられるかについての質問に答えました。ジグソーパズルと英語力チャレンジは、アクティビティでは、ジグソーパズルに挑戦してから後ろに書いてある英語の諺の意味をグループで相談しました。脱出ゲームでは、部屋内で様々なパズルのヒントを探して、英語力と欧米文化知識を

使って脱出できるように色々な質問に答えなければなりません。脱出ゲームが特に難しく、脱出できたのは2つのグループだけでした。

午前のアクティビティの後には、4号館の広場でアメリカン・バーベキュー風の昼ごはんを食べました。ハンバーガー、ホットドッグ、ポテトチップス、コーラと石垣先生の漬物をたくさん頬張りました。

午後には、キャンパス内の宝探し、スカベンジャー・ハントを行いました。英語力を駆使してヒントをもとに問題を解決すると次のヒントへと進むヒント所まで進みます。最後のパズルの手がかりの1部を見つけたら、次の場所までのヒントを考えないとダメでした。1.2.3.

入賞者には、エドワード・フォーサイス英語・英米文学科科長から賞品が手渡されました。入賞者は以下の通り。1位は三浦愛菜さん(英語・英米文学科1年)。2位は三上結愛さん(英語英米文学科1年)。そしてスチューデント・チョイス賞も三浦愛菜さん(英語・英米文学科1年)が受賞しました。今年も1位の学生のスピーチは『弘前学院大学英語英米文学会誌』第48号(2024年3月



発行予定)に掲載される予定になっております。

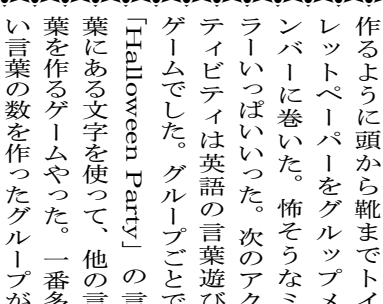
4号館の中から全ての手がかりを集めたら、大講義室に戻ってパズルを解決できるようにグループで議論しました。答えが出たら、マックウイニー先生に報告して FINISH!

English Camp は、英語を上達させるのにも重要なイベントだと参加した学生たちから大好評です。英語を話すスタッフと交流するのも、英語と欧米文化の知識でチャレンジするのも、とても楽しく有意義な1日でした。

2023年10月27日に大学のハロウィンパーティーを行いました。学生60名と教員5名が参加した。参加者の何名かはコスチュームを着てパーティーを楽しんだ。

最初のアクティビティで参加者がドーナツを食べながら、Jack-O-Lanternのクラブを作った。その後、グループごとにミラー作りゲームをやった。楽しみながら良いミラーを作るように頭から靴までトイレットペーパーをグルップメンバーに巻いた。怖そうなミラーっぽいになった。次のアクティビティは英語の言葉遊びゲームでした。グループごとに「Halloween Party」の言葉にある文字を使って、他の言葉を作るゲームやった。一番多い言葉の数を作ったグループが

最後に今年も「Trick-or-Treat」を体験できた。スカベンジャー・ハント型ゲームで、1つ「Trick-or-Treat」場所から次の場所を分るよう、英語のハロウィン文化の問題を解決しないとだめでした。皆さんが「Trick-or-Treat」をして、菓子を貰いながら、アメリカの文化を勉強しました。皆さんはとても楽しいハロウィンパーティーを過ごして、アメリカ文化を経験することができた。



鹿児島国体から得られたこと

文学部 日本語・日本文学科2年 三上 葉月

私は10月13日から16日に鹿児島県出水市で開催された国体・弓道競技に出場しました。弓道競技は28m先の的(直径36cm)を狙いに当たった矢の本数を競う近似的と60m先の的(直径100cm)を狙いの中心になるほど得点が高く、合計点で競う遠射的の2つの種目がありました。結果としては私のチームである青森県成年女子は近射的、遠射的ともに残念ながら決勝トーナメントに出場できませんでしたが、特に遠射的はあと1本、的中していただければ決勝に進めたので、とても悔しい結果で終わってしまいました。

しかし、国体で私が出場

ものがたくさんありました。そのうち自分の中で大きかったことは、全国規模の大会を経験できたことです。国体に向けての練習をしたり、地域の大会には出場したりしていましたが、今回は規模が全く違ったので今までになく緊張しました。しかし、多くの方からの応援や励ましをいただき、一緒に出場する仲間を信じて自分の力を十分に発揮することができました。また、全国の長年弓道をしている大先輩の方々の射形を見ることで非常にいい経験ができました。

もう一つは来年も国体に出場したいと思ったことです。今年



弘学祭企画

4年ぶりの開催となった2023年度弘学祭は多くの方々によりご協力をいただき、無事に終了いたしました。

学祭実行委員会による企画のほか、サークル等学内団体による展示や発表等の企画が実施されました。また、外部団体にもご参加いただきました。あおもりCAPの会による「子どもへの暴力防止プログラム」、弘前モータースクールによるゲーム企画もあり、大いに盛り上がりました。

4年ぶりの開催ということもあり、学生は弘学祭の経験がないため、戸惑ったこともあったかと思えます。学生同士、教員も含め協力しながら企画運営

今年度の国語国文学会の「文学散歩」は、岩手県花巻市で宮沢賢治と高村光太郎を中心に市内各所を回る1泊2日の旅でした。11月3日朝、学生と教員合わせて15名が出発しました。

まず、最初に宮沢賢治記念館・イーハトーブ館、宮沢賢治童話村を訪れました。記念館は、賢治について「農」「宗教」「宇宙」「科学」「芸術」の5つのテーマから彼の実生活や人間関係、創作活動などの展示がされています。また、記念館の近くに童話村があり、ここは名前の通り彼の書いた童話に焦点をあてて

最後までやり遂げたことで日ごろの学生生活とは違った経験を過ごし、良い学びを得ることができたのではないのでしょうか。ご協力いただきました地域の皆様、関係者の皆様、またご来場くださいました多くの皆様へ心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

ここで展示や発表等各企画を紹介いたします。

賢治と光太郎、花巻の旅

文学部 日本語・日本文学科3年 笹森 綾乃

多くの印象を受けました。施設内は、外と同様に賢治作品の世界観をテーマにした展示室になっており、見て楽しむことを目的としているようでした。

その後、賢治が当時北上川の西岸で露出していた泥岩層を見、イギリスのドーバー海峡の海岸を連想したことから「イギリス海岸」と命名した場所へ行き、1日目を終えました。

2日目は、初めに高村光太郎記念館・高村山荘を訪れました。高村山荘は、高村光太郎が7年間ほど住んでいた小屋です。現在、高村山荘は一回りほど大きい小屋で覆われており、そこに当時の高村の写真や解説パネルなどが展示されていました。同

ました。親子連れが写真を撮り楽しんでる様子でした。

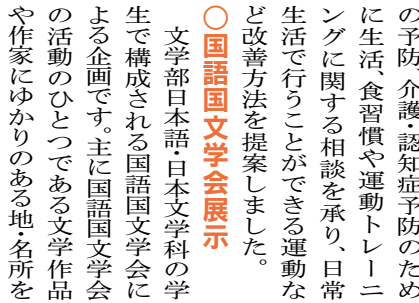


妖怪展

様々な妖怪の絵と解説の展示を行いました。



健康の保持増進、生活習慣病の予防、介護、認知症予防のために生活、食習慣や運動トレーニングに関する相談を承り、日常生活で行うことができる運動など改善方法を提案しました。

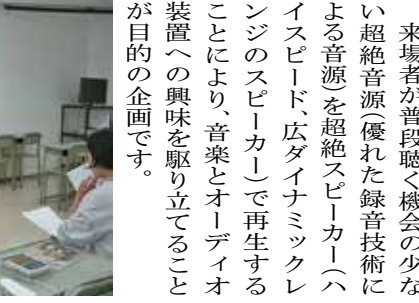


国語国文学会展示

文学部日本語日本文学科の学生で構成される国語国文学会による企画です。主に国語国文学会の活動のひとつである文学作品や作家にゆかりのある地名所を訪れ、作品や作家に関する理解をより深める「文学散歩」について、これまでの活動を振り返るポスター展示をしました。

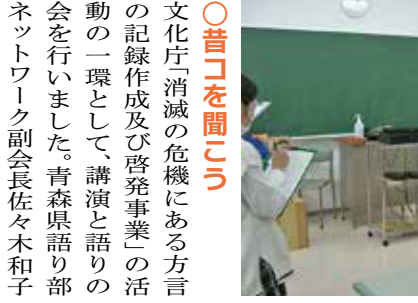


来場者が普段聴く機会の少ない超絶音源(優れた録音技術による音源)を超絶スピーカー(ハイスピード、広ダイナミックレンジのスピーカー)で再生することにより、音楽とオーディオ装置への興味を駆り立てることが目的の企画です。



昔を聞こう

文化庁「消滅の危機にある方言の記録作成及び啓発事業」の活動の一環として、講演と語りの会を行いました。青森県語り部ネットワーク副会長佐々木和子さんによる講演や言語・方言の書籍等の展示もしました。



「地域と音楽資源」

地域総合文化研究所 主事 井上 裕太

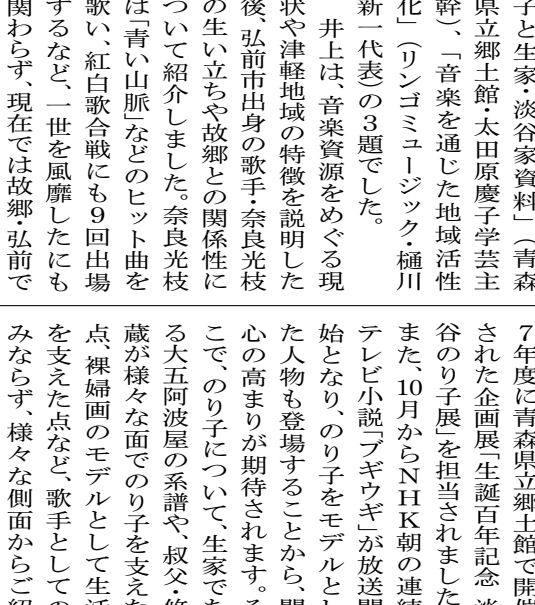
10月8日、弘前学院大学地域総合文化研究所講演会「地域と音楽資源」を大講義室で開催しました。本講演会は、地域ゆかりの音楽家の功績を見つめ直し、継承・活用について考える機会を設けるべく企画したものです。内容は、「奈良光枝と郷土・弘前」(井上裕太)、「淡谷のり子と生家・淡谷家資料」(青森県立郷土館・太田原慶子芸芸主幹)、「音楽を通じた地域活性化」(リンゴミュージック・樋川新一代表の3題でした。

井上は、音楽資源をめぐる現状や津軽地域の特徴を説明した後、弘前市出身の歌手奈良光枝の生い立ちや故郷との関係性について紹介しました。奈良光枝は、青い山脈などのヒット曲を歌い、紅白歌合戦にも9回出場するなど、一世を風靡したにも関わらず、現在では故郷・弘前でさえあまり知られていません。そこで、雑誌等で地元温泉やスキーの思い出など、故郷について語った記事を紹介し、顕彰「弘前アクターズスクールプロジェクト」を設立し、地方アイドルの先駆けとなる「りんご娘」プロデュース。アイドルの育成・マネジメントのみならず、自ら作曲・作詞も行うなど幅広く活躍されています。そこで所属ユニットの楽曲に青森県の要素を織り込み、地域の魅力発信に努めていることなど、音楽による地域活性化を行うに至った経緯や取り組みについて、ご説明いただきました。

また、会場内では奈良光枝の着物を展示しました。これは、奈良家の親族の方が所有のもの、水色の明るい生地に銀糸の刺繍が施されており、ステイジ衣装として使用されていたものと考えられます。

当日は多数の一般の方のご参加があり、「青森県という地域の音楽の特徴について学ぶ良い機会となった」「初めて知ることでも多くとても有意義な内容だった」などの感想が寄せられ、盛況裡に講演会を終えることができました。

なお、本講演会は本学芸員課程との共催として行われ、学生が着物の展示や運営に携わりました。学生にとっても、資料の取扱や講演会の企画・運営に関する実務経験を積む貴重な機会となりました。



「家庭でできる防災グッズ・備蓄食を見直そう」

食生活改善推進委員会および弘前市消防団員の協力により、防災グッズの紹介、防災グッズづくり、防災クイズ、備蓄食レシピの紹介、備蓄食レシピの試食を実施しました。

「超絶音源を聴く」

超絶スピーカーで聴く

